

積乱雲

近頃の余りの暑さにリズムが狂ってしまったらしくて、午前四時に目が覚めてしまった。雨戸を閉めたままでも天窓はすっかり明るくて、青空が覗いているのが寝たままでも見える。一晩中かっ放しだった扇風機にそのまま吹かれながら、昨夜眠るまで読んでいた『百問全集』をまた開いて読みつづける。

陽はいましがた昇ったばかりでまだ斜めの光なのに、その熱が枕元の東側の雨戸を、外から激しく押している気配が判る。早朝から、それもこうして寝転がっているのに扇風機を回さなければならぬ今年の暑さは只事ではない。

午前五時、水を飲み階下に降りて雨戸を開けて驚いた。庭の百日紅の樹の、遙か上空に雄大な積乱雲が聳え立ってちっばけな私を見おろしている。思わず声が出た。

夏の午後から夕方にかけて西北の空遠く、丹沢から甲州にかけての山々の上に湧き上がる入道雲を望むのは珍しくはないが、早朝のこの時刻、南西の方角にこれほど高く、近く、雲の巨人を仰ぐのは初めてである。夕方の金色、真昼の純白、いずれとも違うバラ色の朝陽に染まって屹立する雲の高峰があまり荘厳なものと、普段見慣れない東の方向、左上からの光と影がとても鮮やかなので、雑草だらけの庭が初めて眼にするように美しく思われた。この強い光と濃い影の織り成す光景から思い出すのは、盛んに山歩きをしていた頃のこと、テントを撤収してザックを作り、縦走路に今日のワンピッチを踏み出す時の爽快な気分である。尾根の斜面には黄金色の朝陽に輝くハイマツ、眼下のまだ陽の差し込まない谷には白い霧、頭上遙かに高く秋を予感させる紺色の空、そして遠くの連山の上には早くも湧き上がる純白の積乱雲。

もう三十年も前のことになる。デキルコトナラバモウイチドアノコロニカエリタイ…。

今年の八月十日は朝から猛烈に暑くて、しかも一日中、いろいろな雲が去来する美しい日だった。